

「新しい東北」-作文コンテスト-

中学生の部 入賞作文

中学生の部 優秀賞

20 「復興へのあゆみと故郷への思い」

アメリカ合衆国 田原千聖「中学3年生」

22 「明日は役に立たなくなるかもしれない」

東京都 柴田愛理「中学3年生」

24 「成長した今、復興について考える」

福島県 杉咲頼「中学2年生」

中学生の部 入選

26 「僕が考える復興支援」

愛知県

川崎真央「中学1年生」

26 「語り継ぐ震災とふるさとへの思い」

千葉県

井上麻純「中学2年生」

26 「福島を変える力」

福島県

紺野達夢「中学2年生」

27 「未来への一歩」

福島県

杉本颯希「中学2年生」

28 「大丈夫、そしてこれから…」

ドイツ連邦共和国

鈴木睦稀「中学2年生」

28 「この未来もずっと」

鹿児島県

所崎明音「中学2年生」

29 「これからの福島」

福島県

由田未歩「中学2年生」

29 「東北の未来」

栃木県

氏川桃歌「中学3年生」

30 「確かな情報を求め続ける」

東京都

柴田理紗子「中学3年生」

30 「東北の感動」

東京都

高橋加帆「中学3年生」

30 「知って、伝えること」

東京都

野崎咲太郎「中学3年生」

31 「田巻」

東京都

山口香名「中学3年生」

中学生の部 総評

中学生の部には、総数700作品以上。

日本国内だけでなく、海外の日本人学校に通う皆さんからの応募がたくさんありました。

震災時には、東北で被災した方が、

5年経過した今は海外に留学し、

当時の思いを忘れずに

「ふるさとへの思い」「ふるさとの復興」を綴ってくれました。

また、中学生になると、

被災地へのボランティア経験のある方も多いようで、

実際に自分自身の目で見た被災地の課題や

あるべき未来について、具体的に作文にしてくれました。

東北からの応募者の中には、

将来も地元に残り、地元を復興させていきたいという

想いの込められた作文が見られ、

審査員一同、頼もしさを感じました。

「復興へのあゆみと故郷への思い」

アメリカ合衆国 田原 千聖 「中学3年生」

二〇一一年三月十一日、一四時四六分、東日本大震災が東北を中心に襲った。日本国内外を震撼させた。

その時、僕は仙台市立虹の丘小学校の四年生だった。東日本大震災は授業中に起きた。長い揺れがおさまるのを机の下でひたすら待ち続けた。何とか校庭へ逃げる事ができたが雪が降っている外は寒く呆然と立ち尽くしていたことを今でも覚えている。

ラジオから震災の状況について報告されていた。「仙台市沿岸が津波により壊滅。行方不明者多数」と。僕は一気に頭が真っ白になった。一瞬にして僕の故郷仙台が形を変えた。

これから、僕たちはこの絶望的な状況に向き合わねばならなかった。

東日本大震災が襲ってから数日後、僕は父に連れられ千二百人が避難している避難所の運営を手伝いにいった。僕は最初、乗り気ではなかった。なぜなら、水や食料に困っている今、他の人の面倒など到底みれないと思っていたからだ。

しかし、避難所の現状はひどく想像を超えていた。家族を失い泣き叫ぶ人、食べ物や水がなく今にも死にそうな顔でため息ばかりをつく人、ストレスが溜まり怒鳴り散らす人など様々な人がいた。僕はすぐにも毛布や食べ物の配布を手伝い始めた。

その時、あるおじいさんと出会った。この出会いは「僕たちの町仙台は、僕たちで復興するんだ」と決意させてくれたきっかけとなった。おじいさんは力強くみんなに「何もなくなっただけど命はある。命があるということは何でもできるということだ」と語っていた。興味を持った僕は耳を熱心に傾けた。

それから僕たちは話し合いをかさね、綿花栽培をすることにした。なぜ綿花なのかというと田畑は津波の被害を受け、塩分を多く含んでいたからだ。米や大豆は塩分が多くあると栽培ができない。そこで綿花栽培をすることにしたのだ。

綿花栽培が始まると全国から毎週大勢のボランティアが来た。種まきから

草取り、収穫と徐々に復興が進んでいった。目に見える形で復興が進んでいくことで被災者の顔が明るくなっていった。今でも綿花栽培は続いていて仙台市の小、中学生も手伝うようになっていっていると聞いた。また、僕が仙台市へ向けて書いた「希望の花」という作文が小学生の道德の授業で使われていると聞いた。支援の輪が広がることで僕は喜びを感じていた。面倒だと最初は思っていたがボランティアの活動を続けることでもっと協力したいという積極的な考えに変わっていったのだ。

あの震災は多くの命や物を奪った。しかし僕たちの故郷へ対する気持ちは奪えなかった。これからも東北が復興していくために積極的に協力していきたい。

「明日は役に立たなくなるかもしれない」

東京都柴田愛理「中学3年生」

三月の先輩の卒業式は皆、目に涙を浮かべ別れを告げた。四月からは中学三年生として、学校を引っ張っていく立場となる。そんな時、学校を離れる先輩の背中とは、とても暖かく、大きく感じた。

五年前の三月一二日、気仙沼市立階上中学校では、卒業式が行われるはずだった。あんな悲劇が訪れなかったら、晴れやかな卒業生五十四名が、通いなれた道を踏みしめながら、巣立っていくはずだった。中学校生活の一日一日が、どれほど、ピカピカに輝いているのかは、現役だからよくわかる。そんな生活の一番最後を締めくくる式に、仲間全員が参加できないことの悔しさも、想像することができない。津波は、中学生から感動の涙さえも奪ってしまい、心にぽっかり穴が開いたようになってしまった。だから、卒業式が無事行われたことが、当たり前とは思ってはいけないのだと、痛感した。

しかし、五年たった今、新聞から震災が姿を消しつつあることは事実だ。当時は、連日、どの番組でも報道されていた被災地の姿が、今は、三月一日しか、登場しなくなってしまった。私の中で、報道されなくなったという事は、日々、順調に回復しつつあるという事か、と勘違いしてしまっていた。「五年もたったのだから」そんな風に考えてしまっていた自分がいた。それは、「回復してほしい」という思いがあつて、その思いが、私にそう、感じさせていたのだと思う。だが、ある事をきっかけに、その願いは、むなしくも、夢であったことに気づかされた。それは、ボランティア活動への参加だった。夜間バスで宮城県の山元町に行き、街の様子を見学した後、ある農家さんのお手伝いをさせていただく、という事だった。早朝に現地に着き、バスを降りると、むなしく広がる平地に、廃校となった中浜小学校が無残な姿で取り残されていた。「順調に回復しているのではないのか」私の中に、まるで稲妻が落ちたかのような衝撃が走った。ガイドしてくださった方によると、この小学校にも津波が訪れたのだそうだ。しかし、校長先生の賢明なご判断により、児童はみんな、屋上に避難して一夜を明かし、助かったのだ。姿こそはボロボロだったが、地域住民、在校生徒、先生方合わせて九十名の尊い命を

救ったヒーローだと知った。その校舎の傷は、勲章であると思った。もし、この校舎を東京にある自宅から、新聞などで見ただけだったら、こんな感情は発生しなかったと思う。実際に現地に赴き、現地の方の話を聞き、実物を肉眼で見ることがどれだけ大切で意味のあるかという事がよく分かった。

そして、津波が押し寄せてきてから数日後の避難所の様子も伺った。物資の供給が途絶えている中で、「水」が足りなかったそうだ。そこでは、ある中学生たちが活躍したという。避難所となっていた小学校にはプールがあつて、そこには水も入っていた。その水をすくってトイレまで運び、その水で流せるようになり、衛生的になった。そんな中で、ある一人の男の子が、その子のお母さんに「僕の身長では、明日、プールのそこにある水に手が届かなくなって、皆の役に立てなくなるかもしれない」と泣いて相談したと聞いた。私はそれを聞いた瞬間、自分が恥ずかしくなった。私はこの五年間も、「自分が誰かの役に立てなくなったらどうしよう」と考えたことがなかったからだ。同じ中学生の子が、そのように考えていた時、自分はそこまで考えられていなかった。しかし、これからでも遅くはないと思う。震災の被害を経験はしていないが、「体験を聞いた一人」として、出来る事は沢山あると思う。

震災があつた日から五年間。振り返ってみると、一つ言えることがある。それは、実際に現地に赴くことの大切さだ。それが、ボランティアという形か、観光であるかは関係ない。最近日本人に浸透しつつある、大きな誤解をなくしていき、より多くの人が被災地に興味を持つことが大切なのだと思う。五年経った今、必要なのは物資でなく、心だ。人の心は人でなくては治せないし、癒せない。現在は交通も整備され、東京、東北と言えど離れてはいない。足を運び、同じ日本人として、一緒に復興していくぞ、という心を持った人が、日本中に集まればいいなと思う。

私も、当時中学生だった男の子の言葉を胸に刻み、自分に出来る事は何か、考えながら過ごしていきたいと思う。

「成長した今、復興について考える」

福島県 杉咲頼 「中学2年生」

震災から五年が過ぎました。震災が起こった当時は小さく、ただいつもとは全く違う風景や状況に不安と悲しきでふるえていた私は五年の月日がながれ、中学生になり、心も体も大きく成長しました。自分の成長といっしょに町の景色も震災当時とは大きく変わりました。道や田畑にまで流されてきていたがれきがなくなり、地震の影響でこわれていた家やお店が直され、新しい家もたくさん建ってきました。震災で変わり果ててしまった町が五年でここまで復興されたのには感心とおどろきを感じています。五年という月日は私にとってあつというまに過ぎたように感じましたが、ここまで町をもとに戻すには多くの人の努力によってできたものだと成長した今知ることができ、安心して暮らせることに對する幸せを感じることができました。心から感謝と尊敬をしています。

毎年、三月十一日をむかえるとテレビや新聞、全国で福島県のことや報道されました。毎年この日がくると福島県が有名になった気持ちになります。数々の報道をみて疑問に思うことがありました。震災を経験した私たちにとつてこの震災で学んだことを伝えていかなくてはならないと私は思います。でも震災のときの苦しかった気持ちや悲しみ、震災のせいで不自由な思いをしているという情報が前に出すぎていると思いました。震災のことを思い出すとそのような感情があふれ出てきます。私たちの多くの大切な思い出や多くの大切な命が奪われました。ですが今私たちが後世に伝えていかなければならないのはかわいそうな私たちではなく、あの恐ろしい震災をのりこえ、力強く生きている、今の姿ではないでしょうか。私は震災当時、小さな子どもで何をすることもできませんでした。今も昔と変わらない子どもなのかもしれません。ですが震災で経験したことをさらに伝えていけるのは私たちだと思っています。私たちの未来の生き方が福島島の復興につながるよう今私たちができることは、自分の夢に向かって努力することです。勉強や運動、自分の未来をあきらめずに努力することです。そうして私たちが強く、しっかり生きることが福島島の復興につながると思い

ました。

三月十一日、その日は私たちにとって悲しい思い出がつまっています。ですが、毎年、その日からの年月をふりかえることで私は少し自信がきます。あれほどの大きな災害をのりこえた私たちになら何でもできるのではないかと思えるのです。つらい経験とともにたくさんの方の大切なことも学びました。安心できるあたり前の生活のありがたさ、人と人と思いやりをもって行動すること。一人一人が自分に自信をもつことが福島県の強い力となり、復興というかたちになっていくのだと考えました。

「僕が考える復興支援」

愛知県川崎 真央〔中学1年生〕

とても大きな被害をもたらした東日本大震災、あれから五年の時間が過ぎ、当時小学二年生だった僕も中学二年生になります。長い時間が過ぎたはずなのに、東北の人々は今もお不自由な暮らしをしていたり、不安を感じて生活していると聞き、僕も心が痛みます。僕はまだ子供でお金も力もなく、自分でできる支援は少しの募金ぐらいだと思っただけです。学校や習い事で忙しく、ボランティアとして誰かのために働くこともまだまだそうじゃないからです。でも、たまたま見ていたテレビのニュースで、被災したJ-R女川駅が整備され、新しい商業施設と共に地域住民や観光客に喜ばれるよう複合施設としてオープンすると知り、その光景に驚きました。僕はずっと、被災地に行くのは冷やかし半分の見物人のようで、なんだか失礼な行為だと感じていたのです。東北の魚介類や工芸品なども、デパートなどの特産品展で買う物であり、被災地に行つてそこで商品を買う、観光するというのは全く頭になく、まして被災者の方々が皆に来て欲しいと願っているなんて思いもしませんでした。そして改めて自分ができることを考えた時、僕たちにもできる復興支援の一つに「旅行」があるのだと気づかされました。僕は電車に乗って地方に行き、温泉につかるのが大好きです。J-R女川駅は温泉施設としても整備されていて、駅周辺は新しい商業施設として観光客を呼びこもうと期待されています。いつもは遠くで暮らしていても、時々被災地に足を運び、食事をして買い物をしたり、温泉につかったり宿泊したりして、被災された方々と交流すること、被災地を忘れないでいることこそ、誰にでも可能な支援であるのだと思います。多くの人々が旅先に東北を選んでくれば、東北は活気づくはずで、被災地で食事をすれば、東北の魚や肉、作物を買っていることになるし、おみやげを買うことは東北地方の物を積極的に購入することになるのです。大津波のせいではないけれど、ニュースで見た女川町は違っていました。駅を内陸へ移動させ、土地を何メートルにもかさ上げし、自分たちのほてる海とこれからもいっしょに生きていくという強い信念のもと、安心して暮らせる町に生まれ変わりました。東北地方はともともと自然が豊かで、おいしい食べ物がたくさんある魅力的な地域です。旅行で訪れる人が増えれば、ますます人々も活気づき、魅力が増すことだと思います。

東北へ出かけよう。東北へ旅に出よう。

僕たちが「応援しているよ。」「気にかけているよ。」というメッセージを届けることで、東北の皆さんの笑顔のもととなり、少しでも復興の手助けとなればうれいす。被災地が他の日本の地域と同じ、平和で穏やかな暮らしのある日常を早く取り戻せるよう、心から願っています。

「語り継ぐー震災とふるさとへの思いー」

千葉県 井上 麻純〔中学2年生〕

五年前の三月十日、私はテレビに釘付けになった。同じ日本で起きているとは思えないような見たこともないような映像が次から次へと流れていく。地震が起きた時、私は小学校三年生で教室にいました。私の小学校は千葉県にあり、最初は、小さな地震だと思っただけです。しかし、現実は違つた。東北の町が次々にのみこまれ、破壊されていく。波が引いたあとの変わり果てた姿をテレビで見て、私ははじめてこれが現実なのだと自覚した。自然というものは恐ろしい。人間が築き上げた社会や全てのものを一瞬にして奪っていく。日本は地震大国といわれるほど地震が多い国だ。しかし、私たちはその中で生活しなければならぬ。

復興のために私たちができることは何だろう。募金をする。ボランティア活動をする。被災地の復興を願う。できるだけ被災地で作られたものを消費する。こう考える人が多いだろう。けれど私はそれと同じくらい大切なことがあると思う。それは、震災があったことを「忘れない」ことだ。あの日からもう五年がたった。その中で震災の「風化」が始まりつつあるように感じる。五年前は毎日のように震災のニュースが流れていた。しかし、今はそれも少なくなり、生活の中で被災地の支援を意識することも少なくなった。震災がほんの少しずつ「忘れかけ」られているように思う。震災の話や復興に貢献しようと思うのだが時間と共にそれがだんだんと薄れていく。節電しなければと心のどこかで思いつつもついエテコンのリモコンに手を伸ばしてしまう。私たちは何の不自由もなく今を生きている。しかし、今も避難生活を余儀なくされている人がいる。心や体を痛めている人がいる。東日本大震災は過去にあったことではなく、今も続いているのではないか。

もしこのまま、震災が風化してしまつたらどうなるのだろうか。震災で犠牲になつた人や今も避難生活を送っている人の思いさえも忘れられてしまふ。それは決してあつてはいけないことだ。私たちができる復興とは、お金や行動だけではなく、言葉で「伝え続けること」だと思ふ。私はどんなことがあつても、日本人の一人として日本というふるさとで起きた震災という過去を忘れない人になりたい。このような過去があつたことを心にとどめた。そして、自分をもう一度見つめ直したい。ふるさとで起きた震災。犠牲になつた人々のためにも、私は日本という国を大切にしたい。これから先、生きていきたいと思ふ。一日でも早い震災の復興を願ひ、そして少しでも復興に貢献したいと思ふ。このふるさとで起きた震災を未来へ語り継ぐこと。それが私たちの復興への歩みの第一歩なのだ。

「福島を変える力」

福島県 紺野 達夢〔中学2年生〕

あの日から五年がたった。大震災の直後と現在の福島ではどのようなところが変わったのだろうか。

避難した友人の半数くらいは帰ってきた。町に高速道路が通り活気が戻ってきた。避難した人が戻ってきたことによる新たな出会いもあった。新しい店ができた。

一方、悪い面が変わっていないこともある。風評被害。インターネットなどでは福島に対する酷い書き込みをよく目にする。いまだに立ち入ることのできない区域。住民、避難者の心の傷。

復興が進む中で、一部ではまだ止まったままの時計、全ての面で復興をするためには、この町に住む一人一人の努力が必要だと、私は考える。

福島のための努力とは特別なことではなく、一生懸命働いたり、勉強したりすることだと思ふ。特に中学生の私達には、ひたすら勉強にはげんだりスポーツを頑張ったりすることが一番身近なものではないだろうか。

勉強にはげれば、将来いろいろな仕事に就くことができる。その仕事で世界で活躍するようになれば、それだけでも福島の応援になるだろう。「福島の人達つてすごい。努力家なんだな。」と、他県の方々に感じてもらえればよいのである。

スポーツでも同じである。福島から多くのオリンピック選手が輩出されたら、福島はスポーツの県として一躍注目を浴びるだろう。

小さい努力を積み重ねれば必ず報われる。そしてその努力を世界に認めてもらうことが復興につながる、ということである。それは代表の人だけがやればいいものではない。前に述べたように、一人一人が努力すべきなのだ。一人一人の力が、この福島を「変える力」となるのだ。福島のためにここまで努力する必要はないと考える人もいるかも

中	学	生	の	部	入	選			
---	---	---	---	---	---	---	--	--	--

しれない。しかし福島県の復興は福島県民のためだけではない。私たちは世界中のさまざまな国や団体から支援を受けてきた。その方々のためにも、復興を進める必要があるのだ。

私は、復興後、福島を世界で一番住みよい所にしていきたいと考えている。一人一人の「変える力」で、震災前よりもよい県にする。交通機関が整っている。買い物が便利である。街がきれいである。緑がある。そして何より人の温かきがある。そんな福島にするためにがんばっていきたい。

復興を進める上で忘れてはならないのが、感謝の心。震災を乗り越えて生きていられることへの感謝、支えて下さった方々への感謝。それらを忘れずに努力していきたい。

もう、大人だけにする復興は終わりだ。私たち中学生も、力を合わせて前に進まなければならない。

「未来への一歩」

福島県 杉本 颯希「中学2年生」

「東日本大震災」三・一一は永遠に忘れることのできない出来事だろう。あの日の大きなゆれ、音、散乱しているガラスの山は忘れられない。

あれから五年。震災当時に比べ除せん作業が進み家が建ち、人も増えた。しかし、沿岸部や原発近くには人の姿はない。特に若い人が少なく、戻ってくるのは一部の人だけだ。復興には若い人の力が必要なのにはないのは復興がおくれている一つであるだろう。

原発近くではひなん区域がまだたくさんあり、ひなんしている人は関東や遠い人では九州までひなんしている。沿岸部の人は別の場所へ家を建て、新しい生活をおくっている人が多い。

福島の未来は明るくみんなが笑顔になれる県になるだろうか？ 原発周辺の復興は進んでいるだろうか？ みんな海に入れるようになるだろうか？

私のできることはなんだろう。私は将来看護師になりたい、と思っている。小さいころからの夢だ。勉強して、専門学校へ行き、福島の病院で働きたい。そして、地元にいる人達と協力して復興作業をしたい。そして、この「東日本大震災があったこと」をこれからの未来へ引きついでいきたい。それが私が目指したお第一の夢だ。

将来、ひなんしていた人達が戻ってくればいいなと思う。そのために必要なのは、除せん作業である。多くの地域では除せん作業は終わっているが、「やっても心配」「たいして変わらない」などの意見が多く、戻ってくる人が少ない。

もう一つの理由は、お店がやっていないことだ。若い人が戻ってこないため、病院やスーパー、コンビニはやっていなく、その結果戻って来ても生活できないので、戻ってくることができない。そのため、いつまでたっても人々は戻ってこないのである。

私達のふるさと「福島」は、たくさん課題があり、とても大変である。しかし、それを乗りこえればきっと楽しい未来が待っていると私は思う。今の福島は「被災地福島」といわれているが、いつか「幸せで明るい福島」といわれるような県になつてほしい。

私は、「福がいっぱい福の島」を合い言葉に未来への一歩を毎日ふみ出せるように復興作業を頑張つてほしいと思う。

「大丈夫、そしてこれから…」

ドイツ連邦共和国 鈴木 睦稀 [中学2年生]

「Was everything okay?」

出身地を言う度にそう聞かれた。外人にしてみれば「福島」という言葉は「危険な場所」と同義語なのかもしれない。私がドイツにやって来たのは震災から一年後の夏だった。

「日本のどこに住んでたの？」

「福島。」

最初首を傾げられるが、英語の流暢な日本人が

「ほら、震災があった場所だよ。」

と言うと、決まって誰もが大丈夫だったのかと聞いてくる。英語が喋れなかった私は「大丈夫」と頷くことしか出来なかった。

三月十一日、弟と一緒に下校し、玄関に向かたその時だった。いきなり弟の側にあつた私の自転車倒れた。私は

「私の自転車倒さないでよ！」

と、怒鳴った。すぐさま弟は

「倒してないし！」

と反論した。

「じゃあ誰が倒すのさ？風？」

その質問に答えたのは、弟でも母でも、ましてや風でもなく、巨大な今までに体験したことのない揺れだった。車はガツタンガツタンと左右に揺れ、家の中からは物が次々と落ちる音が聞こえる。何が起きたのか最初分からなかったが、すぐに大地震だと判明した。私達は庭のフェンスにひつしと掴まり、揺れが収まるのを待った。気の遠くなる程長く揺れる地面。電柱や車も揺れ続ける。その光景に畏怖すら覚えた。揺れが止んで数分後、周辺の電柱が折れたら危険だからと、私達は公園に避難した。状況が理解できない幼稚園児らは六年生達に遊んでもらい、私や幼馴染は「何があったの？」「何で家に帰っちゃダメなの？」と、携帯で情報を集めたり、ラジオを聞いたりしていた大人達を質問攻めにして困らせていた。しばらく経ち大きな揺れもなくなったので、全員それぞれの家に帰った。家の中は散乱し、まるで空き巣が入って荒らした後のようだった。

震災直後は計三カ所に避難した。約一ヶ月の間、地元を離れたのは初めてだった。避難時、渋滞で車が進まなかった高速。だが、戻る時はガラガラで止まる事なく進んだ。横浜からいわきまでの道路は、ガタンガタンと何回も地割れのせいで揺れた。自宅周辺に着くと、いつも明るかった住宅街は人気もなく殺風景で、とても寂しかった。

その後、学校も再開し、友達も結構戻ってきた。震災から一ヶ月もすれば、震災前とほぼ変わらない生活ができるようになったが、唯一の変化は学校の休み時間に外出が禁じられ、体育の授業もいつも体育館でした。こだった。

震災から一年が過ぎ、徐々に校庭の放射能も減り、外遊びや運動場での授業もできるようになり、震災前と変わらない生活ができるようになった。そんな矢先、父の転勤でドイツに引越す事になった。あまりにも突然で、皆が一丸となって復興に向けて頑張っている今、福島から離れる事が、友達と離れる事が、私にとっては何より辛い事であった。

ドイツではインターナショナルスクールに通うことになり、色々な国の人と交流ができた。彼らに出身地を言うと「大丈夫だったの？」と聞かれるのはいつものことで、日本人にはさらに詳しく質問されたが、私はいつも曖昧に答えていた。きっと、あの辛かった時のことを思い出したくなかったからだろう。しかし、「大丈夫」と答えるたびに、私の中で「東日本大震災」は辛い出来事ではなく、なっていく気がした。

時は過ぎ、震災からもうすぐ五年経つな、あつという間だな、としみじみ感じていた矢先「Humanities」の授業で自然災害の勉強が始まった。最初に世界の自然災害の被害の大きさを紹介する映像を見た。私の経験した東日本大震災は九位にランキングし、ナレーターがどんな災害だったかを語り始め、画面には津波に呑み込まれていく町や、揺れるビルやオフィス、助けを求めて叫ぶ人々が映し出された。その映像を見てみると自然と涙があふれた。辛くないと言いつつも聞かせていた出来事も、心中では未だに辛い出来事だった。それを改めて実感した。断片的に覚えていた震災の記憶が、走馬灯のように頭を過った。まるであの頃のように「怖い」「嫌だ」と思った。

数日が経ち、三月十一日になった。ニュースを見ると、震災から五年を伝えるものが多かった。確かに、震災直後と比べると沢山の避難区域が解除された。一時帰国する度、地元にも活気が戻ってきていると実感する。震災は忘れてはいけない出来事だが、震災があったという痕跡が残らない位、福島が一日も早く復興し、人々の笑顔や活気が溢れてほしい。そして、世間の福島への印象が「原発のある危ない場所」ではなく「見事に復興した安全な場所」になることを切願している。

私は、鶴ヶ城も白虎隊も、猪苗代湖も磐梯山も、あぶくま洞も花見山公園も、ままだおもしろも桃も、皆大好きだ。いつか、友人に「福島には、こんなにたくさん綺麗な場所や美味しい食べ物があるんだよ。危ない場所なんかじゃないんだよ。」と福島の魅力を紹介したい。「福島」が危険な場所から安全な場所へ、「福島」という言葉が「危険地帯」の同義語から対義語に変わる日が一刻も早く訪れることを願っている。

「この未来もずっと」

鹿児島県 所崎 明音 [中学2年生]

「黙祷。」

授業中、校内放送がそう告げた。その日はあの日から五年の歳月が流れた日であった。目を閉じたその暗闇の中で、五年前の光景がありありと浮かんで来た。

この五年間、体の一部をなくすような、とてつもない痛みを抱えながら、日常という、日々の生活をこなさなければならなかった東北の方々の事を考えると、胸が締めつけられる。家族を、家を、仕事を失ったという事実以上に、喪失感や絶望感にさいなまれ続けてこられたことだろう。

一方で、月日を経て確実に日本は変化してきた。行政の取り組み、各教育機関や企業による独自の安全対策、そして何より変わったのは個人の防災に対する意識だ。

災害に遭うなんて、ごくまれなことだと、他人ごとのように考えていた多くの人々が、必ず起こりうる自然災害の恐怖と防災対策の重要性を、くしくも震災に教えられた。私たちの暮らす地域でも津波対策用の「ザードマップ」が各家庭に配布され、我が家も、家族でいつでも確認できるように、大切に保管している。

私の住む鹿児島は広大な海と雄大な桜島を望むことができる美しい街だ。けれど、この大好きなふるさとを囲む海や活火山は、突如脅威になつてしまつこともある。自然を前にして、人の力がいかに無力かを目の当たりにしてから、自分自身や大切な人の命を守るため、被害を最小限におさえるにはどうすればよいかを真剣に考えるようになった。

私は実際に東北の地へ足を運んだことはない。それでも、遠くはなれた東北へと思いを注ぐことができるのは、その現状を伝えてくれるメディアのおかげだ。今年も当日のみならず、数日にわたって東北の現状を伝える番組が数多く放映された。前を向き、希望や夢をつかもうとされている方々の姿を見て感動し、まだまだ住む所や仕事への見通しが立たない

中	学	生	の	部	入	選		
---	---	---	---	---	---	---	--	--

人々の姿を見て心が痛んだ。ただ、私には、テレビなどで東北の地を見るたびに不安に思うことがある。それは、その光景を目にする、つまり情報の受け手である私たちが、徐々に何も感じなくなるのだ。風化とはそこから始まるものだと思う。

先日見ていた災害への研究に関する番組で、とある海洋研究学者の方がこう述べていた。

「震災から得た沢山のデータをもとに、社会の対策に役立てていきたい。」

あの日のことが起こる前に地震のメカニズムについて少しでも解明していれば、と悔しく思ったその方は、日々研究を重ね、新たな発見をされている。その発見は、海外でも多くの評価を得ているのだそうだ。そのことにとっても感銘を受けた。私には、この方のように秀でた能力はない。が、社会へ貢献していきたいと常に思う。また、私と同じような考えをもつ若者は、世界に数多くいる。その思いで風化を断ちたいと思う。本当の復興は、街をつくりなおしてしまいでなく、次の世代をになう私たちが「感じた」ことを、どのように後世に「伝える」かを考え続けることでもある。

あの日、小学二年生だった私も、中学二年生になった。今は生徒会に入って、学校や皆のために何かできることはないかと、日々模索し続けている。忙しい毎日だが、「人のために行動できる」ということはとても嬉しい。

誰かのために一人でも動いたなら、その行動は多くの人をよい方向に動かせる。震災後の復興の様子を見て、そう感じた。私は誰かのために動く一人になりたい。そのために、どんなに小さなことからでも、私にできることを頑張っていきたいと思う。

これから同じ五年という年月がたった時、日本はどこへ向かっているのだろうか。私は閉じた目を開いた瞬間に光がさしこむように、東北も鹿児島も、明るく輝くものであつてほしい、と思うそのために速くはなれた、この地から「忘れないよ、ずっと想っているよ」と発信し続けたい。この未来もずっと。

「これからの福島」

福島県 由田 未歩 「中学2年生」

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起きた。このことは日本だけでなく、全国的に広まった。あの日から五年がたった今、復興がとてども進んでいる。

震災が起った年は津波の影響で家や商店街がなくなりました。家族や友達が亡くなってしまい、なかなかた直れない人もいたであろう。また、避難してふるさとを離れる人もたくさんいた。しかし、避難している人や被災した人に対して、自衛隊の方々が食べ物や服などを支援していただいた。こんな支援がなかったら今、私たちは暮らせていないだろう。落ち込んでいた街や私たちを元気にしてくれたのだ。

こんな年から五年がたち、復興に向けて東北の人たちはもう、動き始めている。なくなってしまう街を取り戻そうと仮設の商店街をつくって、街の人をにぎやかにしている人や海に出て魚を獲っている人もいる。魚はまだ、少ししか日本各地に出ていないが、早く震災前と同じようになるためにとてがんばっている。このように、東北は復興に向けて協力するようになった。人々の交流も深まり街はどんどん明るくなっている。

しかし、良くなっていることもあるが悪くなっていることもある。それは、高齢化が進んでいることだ。若い人たちに遠く離れたところに避難している人が多い。逆にお年寄りの人は自由に行動ができないため、速くに避難することができないのだ。それだけではなく生まれ育ったふるさとを離れたくないと言う人もいる。こんな理由が原因で、若い人たちがとてもなくなくなってしまったのだ。この問題が進むと、復興をつなげていく人も少なくなってしまう。そして、この震災のことも忘れられてしまうかも

しれない。そのためにも、若い人たちが復興に向けてがんばらなければならぬと思う。

私は、この福島がとて有名なところになってほしい。原発や放射線で知られるのではなく、歴史や景色などの観光地として全国的に有名になるのだ。そのために私たちが生まれ育った福島を変えていくのだ。私たちが次の世代へつなげていく。そして、明るく豊かな福島になってほしいのだ。

震災前の状態に完全に戻るのはいまだ遠いかもしれない。もしかしたら、もう戻らないかもしれない。しかし、戻らなくても震災前以上に明るい街にしたい。だから私は将来、この福島を明るくできるような人になりたいと思う。

「東北の未来」

栃木県 氏川 桃歌 「中学3年生」

今年で東日本大震災から五年目になります。五年前私はニュースで東北の町がなくなる映像を見ました。家族や今まで自分たちの住んでいた場所がなくなってしまう人たちのことを想像すると、とても心が痛みました。あの日から五年がたちましたが、人々が住んでいたところはまだ何もない土地のままのところが多くありと知り、驚きました。なくなるのは一瞬なのに、取りもどすには何年もかかります。それは人の心も同じだと思えます。

私は今後の東北の復興は、東北の良さを世界中に発信し、東北の人々が自由に店などを開けるようにすることが重要だと思えます。

なぜなら、東北の良さを世界中に発信することで多くの人が東北を訪れるようになるからです。そうすることで、産業や商業が活発になりまた以前のにぎやかさを取り戻していけるのではないかと、思うからです。私たちが実際に東北を訪れることにより、東北の経済がうるおい、復興の手助けをすることができます。これなら、今まで復興を難しく考えていた人も、多くの人が協力できます。また、自分で東北を見て、直接現地の人から震災の話聞くことで、一人一人の心に震災の記憶を刻みこむことができ、風化防止につなげていくことができます。震災は、現地の人だけが記憶するものではありません。全世界の人々が一人一人の心にしっかりと刻みこみ、共有し合うものだと思えます。東北に実際に行き、自分の目で見て、自分の耳で聞くことはとても大事なことです。

東北を活発にするには人の力が必要です。もし、東北の人々が自由に店などを開けるようになったら東北はどう変わるのでしょうか。人々は仕事をすること新たな生きがいを見つけることができます。しかし、店を開くということは簡単なことではありません。いろいろな手間やお金がかかってしまいます。それらのことを軽減していくのが今後の復興へのカギとなるでしょう。例えば、店を開こうと考えたときに気軽に相談できる場所をつくるというのはどうでしょう。店を開いたことがある人ももちろん、店を開いたことがない人も安心して店を開くことができます。そうすることでたくさんの店が開き、東北は活発になることができます。

私の考える東北のこれからの復興は、世界中の人たちに東北の良さをたくさん知ってもらい、東北を訪れる人を増やすことです。そして人々の生きがいをつくり、明るい東北にしていこうです。東北の未来は一人一人の心が一番大切でです。みんなの心が集まると東北は復興することができるのだと思えます。

「確かな情報を求め続ける」

東京都 柴田 理紗子「中学3年生」

確かな情報を求めることは、いつどんな場合でもとても重要です。きつとこれは誰にでも分かることだと思います。しかし5年前にあの大震災が起こってから今までに、数々の噂が流れ、それを鵜呑みにしてきた人は沢山います。

私は社会科の授業で、被災地でとれたいたけ、柿、かきなどの話を色々聞いて学んできました。その生産物のほとんどに共通する点は、風評被害をうけているということです。生産者の方たちは、消費者たちのために思い、丹精込めてつくった作物などを厳しい検査にかけたり、大変な試験操業を続けていたりしています。けれど消費者たちは、「原発から近いから」「被災地でとれたものだから」と、安全が確認されたという事実には目もくれず、他の地域でとれたものを選んで買う人も数多くいます。

このようなことを学んできた私が、しなくてはいけないなと思ったのは、被災地の方々のこういった努力、そして安全であるという事実を身近な人から広めていくことです。今まで、被災地でとれたものの放射線量は基準値以下ですとか、そういった情報はテレビなどの直接関わりを持たない人たちが人々に訴えかけていることが多かったように思います。なので視聴者にとっては、信憑性があまりないように感じられ、原発に近いから危険であるに違いないと、放射線の恐れが人々の疑い、噂を広めているのだらうと私は考えました。だから、まず自分の身近にいる人から、正確な情報を伝えていくべきだと思うのです。

悪い噂にだまされてしまうのは、テレビで何度も津波の映像が流れたり、放射線の恐ろしさが報道されたりしていたので、それは仕方のないことかもしれませんが、ただ、「被災地産はノー」という認識で過ごしていくのは、いけないと思います。むしろ、とても残念だと思います。

私は授業で被災地産のものを学んでいくときに、「おいしそうだなあ。食べてみたいなあ。」とか、(つくっている人の話を直接きいてみたなあ。)などと色々なことを思いました。それぐらい、おいしく育つようにつくっている人からの愛情をたっぷり浴びて、しかもきちんと検査したりして安心安全が保証されているからです。これは、一度味わつてみないと絶対に損だと思えます。

風評被害にも負けずに頑張っている人は、沢山いると思います。私たちは、確かな情報を知り、被災地の人たち、そして生産されたものを信じるということが、皆が出来る、「被災地を応援する」ということです。そのためにも、被災地の、今の正確な情報をこれから先、ずっと求め続けていくことがとても大切です。私は、自分出来ることをこれの他にも探して、積極的に実行していきます。

「東北の感動」

東京都 高橋 加帆「中学3年生」

私が始めて東北に行ったのは小学校の低学年の時のことだった。スパリゾートハワイアンズを目当てに福島へ行った。その時は震災前で、ハワイアンズは大盛況。フラダンスも今でも覚えている位印象的で感動し、とても楽しくいい思い出。

その後、私が東北を訪れたのは震災後の小学五年生の夏休みのことだ。震災後、前に来た時から数年しか経っていないのにハッキリと震災のあとが見てとれた。高速道路から見えるがれきの山。くずれているブロック。い。どれも、痛々しくて見ていて気持ちのよいものではなかった。そこで私は始めてインターネットやテレビの中ではなく生で、東北の「被災地」と

しての姿を見た。

でも、その東北旅行では東北の違う一面も見た。まず、私が訪れたのは松島だ。かもめにえびせんをあげながら船で松島を見て回った。松島で間近に見たかもめから伝わってきたのは力強い「生」だった。東北の自然の豊かさを表している松島の絶景は本当に感動した。また、その他にも岩手の平泉に行った。そこで目にしたのは、まさに芭蕉の、「五月雨や 降残してや 光堂」

という句がビタリな本当に華やかで目をひく中尊寺金色堂だった。緑がおいしげの中、何時間も並んでまで見た金色堂は小学生ながら何時間も並ぶ価値があったと思えるほど、インパクトが強く感動した。こんな美しい歴史がある東北はいいなあと思った。

以上二つにあげた旅のように私の東北の思い出はいつも感動がつきものだ。ハワイアンズのフラダンス、松島の自然、歴史深い平泉の数々の寺。私が震災後の旅行で見れたものも少なからず震災の被害を受けただらう。きつと復興していたから見た、というものもある。また、震災で今も復興できておらず変わってしまった部分もあり、そこではふるさとの人が今も苦しんでいる。でも、変わらず残った、あるいはふるさとの人達のおかげで復興できたもの、そこが東北の真の良さになっているのではないだらうか。

おいしいかきなどの魚。米。果物に野菜。食べ物ではなくとも松島も平泉も本当に素晴らしい所だった。このような、東北の良さを理解し、新たに発信する。そんな少しのことが被害のなかった私達が、頑張っている東北の人へ向けてできる一つの復興の形なのだと思う。

「知って、伝えるということ」

東京都 野崎 咲太郎「中学3年生」

僕は昨年の夏、被災地を訪れました。どこに行っても、何も無い平らな土地が広がっていました。盛り土の山でした。何台ものショベルカーが、轟音を立てて作業していました。

陸前高田市では、いたるところにベルトコンベアが張りめぐらされていて、山を発破作業によって崩した土砂を町に運んでいました。奇跡の一本松を見に行つたのですが、それよりベルトコンベアの規模の大きさに圧倒されてしまうほどでした。この盛り土が終われば、あとは住宅を高台に移転するだけです。もう新しい街ができるまであと少しのように感じられました。

しかし、こんな声もありました。宮古市田老地区では、これまで防潮堤があつたにもかかわらず、津波によって多くの人が亡くなった教訓から、もっと巨大な防潮堤を作る工事が始まろうとしていました。

これで安心だらうと誰もが思うのではないかと、地元の方に聞いてみると、意外な答えが返ってきました。「安心と言えはそうなのです。でも、この田老が誇れるきれいな海の景色が、町から見えなくなってしまうことになり、残念な気持ちも正直あるのです。」

僕はてっきり、津波を実際に見てから、海を見たくないという気持ちのほうが強け、海が見えなくなることにもむしろ賛成なのかと思っていました。田老の人たちは、長年慣れ親しんでいた海が見えなくなること、危機感を抱いていました。

「もちろん津波は嫌。でも、海が見られなくなるのも寂しい。」こんなところにも今の被災地の復興のむずかしさが表れているのではないかと思います。テレビドラマで有名になった久慈市にも行きました。夏の観光シーズン

中	学	生	の	部	入	選		
---	---	---	---	---	---	---	--	--

にもかわからず、思ったより町はがらんとしていました。駅やその周辺にはいるものの、一歩町の中に足を踏み入れると、人通りはまばらでした。復興支援ツアーなどで訪れる場所はみな決まった場所で、観光客がいる場所とない場所ではまるで別の町であるかのような装いを見せていました。

前に書いたように、いろいろ問題は抱えているものの、被災地の復興は進みつつあります。しかし、それがあまりにも周知されていないと感じます。

確かに震災前から過疎は問題となりましたが、せっかく復興しても観光客が戻ってこなければ、町はますます寂れてしまうかも分かりません。

町は安全な高台に移動して、住民の暮らしは快適に、商店やホテルは大賑わい。そんな理想の姿を実現するためには、被災地の今を知った僕たちが発信していかなければいけないのではないでしょうか。ただ知った、分かったで終わらせるのではなく、友達一人からでも被災地のことを伝えていく、こそが、中学生の使命だと思います。

今回被災地に行つて、東北の美味しいもの、美しい風景、あったかい人たちなど、本当にいろいろな魅力を見つけました。これからは、もっと東北のよさをみんなに伝えていきたいです。

「田老一中から学ぶこと」

東京都 山口 香名「中学3年生」

静かな体育館に、東日本大震災で大きな津波にのまれた宮古市田老の中学生の声が響く。彼らが話す体験談と復興への日々を、私たち東京都小金井市の震災未経験者の中学生が全力で聞いていた。田老第一中学校との交流会。これは、私たちが田老一中の中学生から震災を学び、そしてこれから自分達はふるさとに何をしたいのか、ということを見聞交換する会だった。私は今まで何度も授業やTV、新聞から震災について学習してきた。あんぼ柿を復活させようと努力する人、一人のサラリーマンが花火で被災地を笑顔にしたこと、一人の主婦が震災の体験を俳句にして残していること……。そして、そこから多くの学びを得た。だが、今回の交流会では、まさに本人から話を聞いた。だから、田老一中の人の息づかい、表情、言葉の間……。全てが全身に伝わってきて、「事実を知る」ということ以上の何かがあり、そこに力強さをも感じた。それと同時に、「未来の東北」のヒントが見えた。

田老一中のお話には、大きく共通していることが二つあった。

一つは、常に前を向いているということだ。もちろん、辛い気持ちは変わらない。しかしそれでも田老一中は、前を見ている。「田老#被災地」という言葉を強調し、復興していることを伝えていた。また、校歌を聞かせてくれた時は、全員が力強く上を見て歌っていた。一番辛い被災者が、本当は一番前を見て努力している……。こんな姿勢は私の心を強く打った。もう一つは、ふるさとへの愛だ、こちらもどの話でも伝わってきた。その中でも印象的だったのがある男の子の話。彼は、心に傷はあつても、大きな「夢」がある。それは、大好きなじいちゃんのような漁師になることだ。大切な物を沢山さらった海で働く。もし私だったら、こんな選択は出来るだろうか。そんな海と向き合うことは、ふるさと愛がないと出来ないだろう。

このように、私はこの交流会で多くを感じた。そこでまず、東北の復興の為にはこのような直接的な交流を増やすべきだ。そして、そこで皆が何かを感じることが出来たら、それが次第に行動という形になるはずだ。今回は同じ年で、おしゃべりしても私と変わらない普通の中学生だった。だからこそ、話を聞いた時は見ている物の違いに驚いた。

最後に、私が東北の未来を描くとするならば、そこには「地元の人」が、ふるさとでキラキラ働ける「東北」がある。二つめの例で紹介したように、東北には地元を愛する若者がいる。もし、何年か経つて田老一中の友人達に再会したとき、彼らがふるさとでのびやかに働いているのなら……。それほど嬉しいことはないだろう。